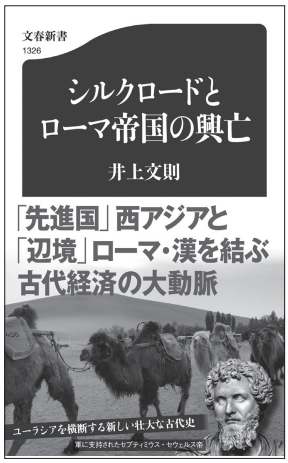
井上 文則 著

シルクロードとローマ帝国の興亡

紹介者 美那川 雄一



文藝春秋
2021年8月刊
新書判
232ページ
本体850円

目次

はしがき
序章　ローマと漢はなぜ滅んだのか？――宮崎市定とアルバート・ヘルマン
第1章　シルクロードが運んだもの
第2章　シルクロードがもたらしたローマ帝国の繁栄
第3章　ローマが重視した砂漠と海のルート
第4章　ユーラシアを襲った変動
第5章　東西分裂へ――軍事政権・増税・異民族の侵入
終章　世界史の中のローマ帝国
あとがき

「ローマはなぜ滅びたか」という問いは、歴史学の永遠のテーマである。今まで多くの研究がおこなわれてきた。ローマ帝国のみならず、秦・漢王朝、モンゴル帝国、スペイン帝国、大英帝国など、帝国の興亡に関する研究はつきることのない議論を引きおこし、いまだに唯一の解が定まることのないこれらの問いは、歴史教育においても生徒の関心をひくテーマである。

著者の井上文則早稲田大学文学学術院教授は古代ローマ史の研究者であるが、アジア史への造詣も深く、東洋史学者である宮崎市定についての評伝も執筆されている。本書も、その宮崎市定の「シルクロード交易が漢を滅ぼした」という説から始まり、ヘルマンが『楼蘭』のなかで指摘したローマ帝国衰退論との共通点を見出している。つまり、ユーラシアの東西にあった漢とローマ帝国は、シルクロード交易を通じて結果的に多量の黄金を国外へと流出させることとなり、国内の黄金の枯渇が滅亡につながったという仮説を見出す。著者はこの仮説に対し、1次資料や歴史学上の議論をふまえながら反証していく。

考察はシルクロード交易によるローマ帝国の繁栄と衰退の両面からおこなわれ、その論点は大きくわけて5点ある。第1に、シルクロード交易におけるローマの輸出品と輸入品の特定とローマ社会への影響（第1章）、第2に、シルクロード交易の関税収入や交易に関与したローマ人たちの利益とローマ社会にもたらした繁栄（第2章）、第3に、シルクロード交易ルート支配のためのローマ帝国の外交政策（第3章）、第4に、2世紀後半以降のユーラシア大陸の王朝交代やパンデミック、戦争などによるシルクロード交易の停滞（第4章）、そして第5に、シルクロード交易の停滞がローマ社会に与えた影響（第5章）である。

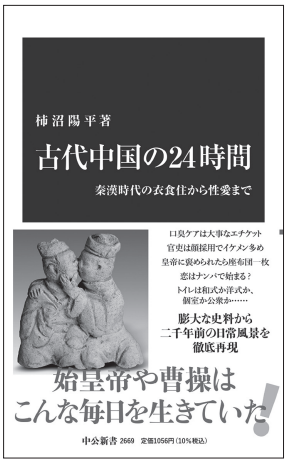
説明は論理的かつ平易な文章で、シルクロードとローマ帝国の関係性を丁寧に解き明かしてくれる。一方でエヴェルジェティズムのような最新の学説をも紹介してくれており、探究を進めるための最良の入門書でもある。地図も豊富に掲載され、『エリュトラー海案内記』のように、われわれ高校教員にとってはなじみのある史料も多く言及されており、世界史探究の授業でも使用しやすい。そして、何よりも高校生自身が読んで、ローマ帝国の衰退について思考を深めることのできる一冊である。歴史を「広い視野」でみることの重要性を感じ取れるに違いない。

（みながわ・ゆういち／静岡県立小山高等学校教諭）

柿沼 陽平 著

古代中国の 24 時間
――秦漢時代の衣食住から性愛まで

紹介者　角田 展子



中央公論新社
2021 年 11 月刊
新書判
336 ページ
本体 960 円

目次

プロローグ――冒険の書を開く
序章　古代中国を歩くまえに
第 1 章　夜明けの風景――午前 4 ～ 5 時頃
第 2 章　口をすすぎ、髪をととのえる――午前 6 時頃
第 3 章　身支度をととのえる――午前 7 時頃
第 4 章　朝食をとる――午前 8 時頃
第 5 章　ムラや都市を歩く――午前 9 時頃
第 6 章　役所にゆく――午前 10 時頃
第 7 章　市場で買い物を楽しむ――午前 11 時頃から正午すぎまで
第 8 章　農作業の風景――午後 1 時頃
第 9 章　恋愛、結婚、そして子育て――午後 2 時頃から 4 時頃まで
第 10 章　宴会で酔っ払う――午後 4 時頃
第 11 章　歓楽街の悲喜こもごも――午後 5 時頃
第 12 章　身近な人びとのつながりとイザコザ――午後 6 時頃
第 13 章　寝る準備――午後 7 時頃
エピローグ――1 日 24 時間史への道

本書のタイトルから『古代ローマ人の24時間』（アルベルト・アンジェラ著、河出書房新社、2012年）を想起した人も多いだろう。著者自身がエピローグで語っているように、本書執筆の背景には同書の刺激があったようだ。はたして、本書は、同書に劣らず、古代中国における日常生活をいきいきと描き出しており、一気に読める面白さだった。

近年、古代中国を舞台にした漫画や映画も少なくなく、人々の日常生活について、私たちも何となく視覚イメージをもっているが、それらがどこまで史実にそくしているかは心許ない。その点、本書は気鋭の中国貨幣経済史研究者が、中国古代史の主要な史料のなかから日常史に関するものを収集し、さらに壁画、画像石、明器（副葬品として制作された家屋や調度品などのミニチュア）などの非文字史料も豊富に用いて、日常生活を忠実に再現した力作である。語り口は平易で高校生でも十分読めるが、約900箇所におよぶ膨大な巻末注が付いていて、どの叙述にも論拠が明記されている。授業で使うとしたら、歴史叙述には裏付けとなる資史料が存在することの例として、本書の一部を用いてもいいだろう。さらに図版史料も随所に掲載されていて、これだけでも一見に値する。（漢代の公衆トイレ遺構や漆塗り便座の写真は必見！）

ここに描き出されるのは、古代中国における、様々な階層の人々の日常である。歯磨きをどうしていたのか、口臭のお手入れは？　入浴は？　女性はどのくらい化粧にこだわっていたのか、食事の際の席次はどのように決まっていたのか、官吏の挨拶の礼儀はどうなっていたか、婚姻と出産は？　など枚挙にいとまない。

日常史の意義は、中国古代史をとらえるための尺度の１つ、すなわち環境史、政治史、経済史、人物史などに加えて、日常史の層を積み重ねることで、歴史を立体的、多角的に考察できるようになることにあるのだろう。

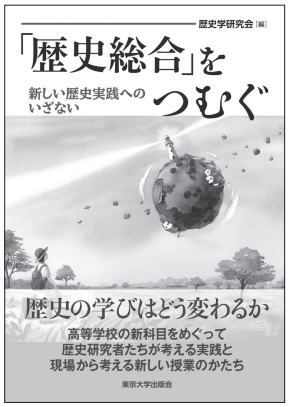
皇帝が長引く会議中に別のことを考え、官僚が仕事のあとにどこの酒席に行くか悩み、庶民は市場での商取引に頭を使っていることなどを史料から読み解いていく。現代の私たちと驚くほど同じような面も多い。一方で大きく違っているところも少なくない。とくに、ジェンダーに関する価値観の違いは生徒には衝撃ではないか。また、子どもに関する記述が少ない、これは何を意味するのかという観点から古代中国の社会を考察するのも、豊かな探究活動につながるだろう。

（つのだ・ひろこ／東京都立青山高等学校指導教諭）

歴史学研究会 編

「歴史総合」をつむぐ
――新しい歴史実践へのいざない

紹介者　小川 正樹



東京大学出版会
2022年4月刊
A5判
285ページ
本体2,700円

目次

はじめに――「歴史総合」と歴史研究
歴史の扉
①史実の作られ方・歴史像の形成／②「豊かな生活」の成り立ち／③「日本」の枠組み／④女性の歴史／⑤産業革命／⑥政治の担い手／⑦近代社会と宗教
国際秩序の変化や大衆化と私たち
⑧ファッションの形成／⑨「1968年」の広がり／⑩二つの世界大戦
グローバル化と私たち
⑪カタストロフの心性／⑫移民／⑬冷戦下の国際社会／⑭植民地支配の問い直し／⑮グローバル化と地域
教室から考える「歴史総合」の授業
補講①いまを主体的に問う／補講②生徒の関心から問う／補講③図像史料を読み取る
あとがき

「歴史教育のあり方を刷新する」ために2022年から新科目「歴史総合」の授業が全国で始まった。この新科目はこれまでの「暗記科目」「正答主義」から脱して、多様な資料から事実を発見して考察し、自分で解釈を作り上げる歴史実践を生徒が授業で体験することを目標としている。だが現実には、試験や入試で高得点することを優先する歴史教育の弊害といわれる状況が存在している。こうした現状に対し、「歴史総合」の授業は生徒の主体的思考、歴史観の構築、予測困難な社会の変化への主体的関わりを可能とし、本書は生徒がよりよい社会を構築して幸福な人生を創り出すことを可能にする手段を提供できると主張する。補講①～③では、実際に高校でおこなった取り組みを紹介し、ここから生徒が多様な考え方をもち、「正解」を覚えるのではなく、「解釈」を作り上げる歴史実践の可能性を感じる。

こうした歴史実践をおこなうために必要なことは何か？　本書は教員みずからも歴史観を構築・更新し、生徒と同様に歴史実践に取り組み、歴史に向き合う意味を再認識することであると訴える。教員が「正解」を説明し、生徒がひたすら重要事項を暗記するだけの授業ではなく、教員と生徒がおのおのの歴史観にもとづき、主体的に考えて解釈を自分たちで作り上げる授業をめざす。それにより自分と他者、日本と世界を理解する強力な道具を獲得し、歴史を学ぶことは自分の人生において役に立つと認識してもらえると主張する。ただし、本書は教員に歴史研究者になることを求めているわけではない。歴史教育者として歴史観をもち、生徒とともに歴史実践を実行することが重要であると訴え、その材料を提供する。

明治大学創立者の一人である岸本辰雄が「徒らに死せる知識を授くるが如きこと無く、勉めて活ける学問を与えざるべからず」と語っているように、生徒たちに活きた学問・知識を教授すべきことは100年以上前から主張されている。しかし現実には、歴史の多様な発展や歴史解釈の多様性を説明することは教科書編集段階から避けられる傾向にあったと油井大三郎は危惧していた。そのため本書は、授業で活用できる最適な材料を持ち合わせていない教員のために、最新の研究成果を時系列ではなく、「歴史総合」の大項目に対応する形で提供してくれている。「歴史総合」の授業がよりよい社会への第一歩となって欲しい、そうした歴史研究者の情熱と希望がつまった一冊である。

（おがわ・まさき／函館ラ・サール中学校高等学校教頭）

橋場 弦 著

古代ギリシアの民主政

紹介者 三森 朋恵

岩波書店
2022年9月刊
新書判
268ページ
本体900円

目次

はじめに
第1章　民主政の誕生
第2章　市民参加のメカニズム
第3章　試練と再生
第4章　民主政を生きる
第5章　成熟の時代
第6章　去りゆく民主政
おわりに――古代から現代へ
あとがき
図版出典一覧
関連年表
主要参考文献

「自分自身で決定し実行することが、何にも代えがたく尊い価値である」。ギリシア人にとってデモクラティア（民主政）とは教わるものではなく「生きるもの」であった。そのありようを、彼らの歴史的経験にもとづき明らかにすること。本書における著者の目的はこの点にある。そのなかで、民主政を生きるものとならしめていた根源的要因を、冒頭の一文に集約している。

高校世界史で取り扱われる内容、たとえば、王政から貴族政、財産政治といった変遷や、僭主の登場およびその対応としての陶片追放などはほぼ網羅されている。ソロンやテミストクレス、ペリクレスなど民主政発展の立役者たちの諸政策や背景事情についても、出自や演説内容をふまえた叙述がなされ、具体的かつ詳細だが要点がとらえやすい。ポリス防衛への貢献度と政治参加の関係性に着目させる授業展開は多いが、本書のラウレイオン銀山と海軍力の強化、その後のデロス同盟におけるアテネの経済的・軍事的影響力についての記述は、その理解をうながすものと感じるとともに新鮮さがあった。

上述のほかにも多くの気づきが得られたが、とくに「第４章民主政を生きる」に触れたい。古代ギリシアの民主政と近代民主政治とを区別して、著者は「あずかる」と「代表する」という語で表している。この違い、および古代ギリシアの民主政の特徴を示すうえで、アテネの政策や社会、宗教観を取り上げている。その１つである10部族制についての記述も興味深い。「新部族は血縁集団でも地縁集団でもなく、観念の中だけでイメージされる、まったく人工的に編成された組織である。だから出身地域や貧富貴賤など、それまで政治社会で人びとを差別していた属性は、ほとんど意味を失った。」氏素性に関係なく平等に振り分けられたこの政策に加え、できるだけ多くの市民で役職を担う意義を見出していたこと、アテネ市民の識字率が決して高くないにも関わらず政治参加の障害とならないこと。本書を読み進めるうちに、政策や制度は思想と深く結びついていると再確認する時間ともなっていった。

世界史という観点からも多くの学びが得られたのはもちろんだが、我々が「教えている」民主政というものを俯瞰するような読後感を得た。冒頭の一文は、一個人のあり方として生徒たちに提示したいものでもある。翻って、「自らはそのように生きているか」という問いに向き合う読書体験であった。

（みつもり・ともえ／秋田県立大館鳳鳴高等学校教諭）